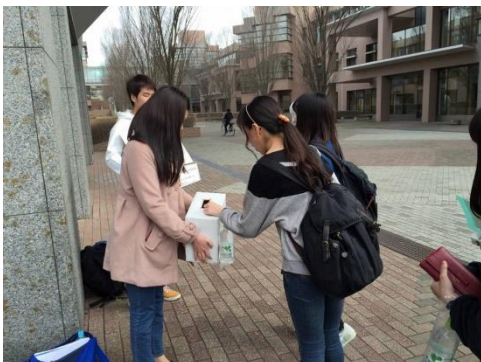


# 「熊本地震」災害支援プロジェクト活動報告書

## I.募金活動

- ・実施期間：2016年4月19日(火)～4月28日(木)
- ・実施場所：岩手県立大学構内、駅前ラーメン(募金箱設置)
- ・活動内容：熊本地震における支援金募集の呼びかけ
- ・参加学生：風土熱人Rからは20名参加。
  - ・川原千晶(看護) 齋藤佑衣(看護) 高橋栞菜(看護) 照井里佳子(看護) 手塚愛梨(看護)
  - 前川美里(社会福祉) 石田雪乃(社会福祉) 市野涼子(社会福祉) 高橋遼太(社会福祉)
  - 前川美穂(社会福祉) 杵淵陽海(社会福祉) 佐藤優(社会福祉) 箱石文紀(ソフト)
  - 池之上楨哉(ソフト) 藤村咲月(総合政策) 山田美紗(総合政策) 川原直也(総合政策)
  - 野田美咲(総合政策) 阿部真理(盛岡短期大学部) 竹居美佳子(盛岡短期大学部)
- ・募金総額：161,886円
- ・寄付先：「熊本県立大学 学生ボランティアステーション」の運営資金

### ◇活動写真◇



## II. 熊本県災害支援活動

- ・実施期間：2016年4月29日(金)～5月7日(土)
- ・活動地域：熊本県熊本市
- ・活動内容：「一般社団法人 SAVE IWATE」の支援活動(炊き出し活動)に参加。
- ・参加学生：風土熱人 R からは1名参加。
  - ・川原直也(総合政策)

### ◇活動写真◇



### Ⅲ. くまもと GINGA-NET プロジェクト

- ・実施期間：2016年9月6日(火)～9月11日(日)
- ・活動地域：熊本県益城町とその周辺地域
- ・活動内容：仮設団地でのお茶っこサロン活動、聞き取り調査、子どもの遊び支援
- ・参加学生：風土熱人 R からは3名参加。
  - ・小笠原果美(社会福祉) 池之上楨哉(ソフト) 川原直也(総合政策)

#### ◇活動写真◇



※別途、活動報告書あり。

#### IV. 第2回くまもと GINGA-NETプロジェクト

- ・実施期間：2017年3月17日(金)～3月21日(火)
- ・活動地域：熊本県益城町とその周辺地域
- ・活動内容：仮設団地でのサロン活動(DoNabeNet)
- ・参加学生：風土熱人 R からは4名参加。
  - ・川原千晶(看護) 石田雪乃(社会福祉) 池之上楨哉(ソフト) 川原直也(総合政策)

#### ◇活動写真◇



※別途、活動報告書あり。

# “学生がつなぐ、支援のバトン” 「くまもと GINGA-NET プロジェクト」

## 報告書



特定非営利活動法人 いわて GINGA-NET

「くまもと GINGA-NET プロジェクト」いわて学生チーム

平成 28 年 11 月

## 目次

1. 「くまもと GINGA-NET プロジェクト」概要
2. 「熊本地震」被害概要
3. 活動報告
  - (1) 全体行程
  - (2) 各日の活動内容、感想
4. 学生からの感想
5. メッセージ
6. 添付資料
7. 活動協力者紹介

## 1. 「くまもと GINGA-NET プロジェクト」概要

(1) 活動期間 2016年9月7日(水)～9月11日(日) 4泊5日

日 程	内 容
9月06日(火)	前日入り 熊本県立大学他、関係者打合せ
9月07日(水) 13時集合	■熊本県立大学 集合 視察巡回、オリエンテーション
9月08日(木)	活動
9月09日(金)	活動
9月10日(土)	活動
9月11日(日) 11時解散	最終ふり返り ■熊本県立豊野少年自然の家 解散

(2) 活動地域 熊本県益城町とその周辺地域

(3) 宿泊場所 熊本県立豊野少年自然の家(熊本県宇城市豊野町山崎 1775)

(4) 主な活動  
・ 応急仮設住宅におけるサロン活動  
・ 子どもの遊び、学習支援

(5) 主 催 特定非営利活動法人いわて GINGA-NET

(6) 協 力 熊本県立大学学生ボランティアステーション  
ふくおか学生熊本地震支援実行委員会  
岩手県立大学 (一社) 子どものエンパワメントいわて 他

(7) 参加者 大学生 19名  
(右表: 参加者の所属校一覧)

地方	学校名
九州	熊本県立大学
	福岡県立大学
	北九州市立大学
	福岡女子大学大学院
中国	島根県立大学
四国	高知県立大学
東北	岩手県立大学

## 2. 「熊本地震」の概要

平成 28 年 4 月 14 日 21 時 26 分に熊本県熊本地方を震源としたマグニチュード 6.5(暫定値)の地震が発生し熊本県益城町で震度 7 を観測した。その 28 時間後の 4 月 16 日 1 時 25 分には同じく熊本県熊本地方を震源としたマグニチュード 7.3(暫定値)の地震が発生し、熊本県益城町と西原村で震度 7 を観測、津波注意報が発表された。

### 【4 月 14 日 21:26 以降に発生した震度 6 弱以上の地震】

4 月 14 日	21:26	震度 7	熊本県熊本
	22:07	震度 6 弱	熊本県熊本
15 日	0:03	震度 6 強	熊本県熊本
16 日	1:25	震度 7	熊本県熊本
	1:45	震度 6 弱	熊本県熊本
	3:55	震度 6 強	熊本県阿蘇
	9:48	震度 6 弱	熊本県熊本

4 月 16 日 1 時 27 分に津波注意報発表。同日 2 時 14 分に津波注意報解除。4 月 15 日に気象庁が「平成 28 年(2016 年)熊本地震」と命名。

被害状況に関して、人的被害は死者 98 名、負傷者 2,321 名(重症 830 名、軽傷 1,491 名)。建物被害は全壊が 8,198 棟、半壊 29,761 棟、一部破損 138,102 棟、火災 16 件(消防庁情報：9 月 14 日現在)。土砂災害発生状況 190 件、そのうち土石流等 57 件(熊本県 54 件、大分県 3 件)、地滑り 10 件(熊本県 10 件)、がけ崩れ 123 件(佐賀県 1 件、長崎県 1 件、熊本県 94 件、大分県 15 件、宮崎県 11 件、鹿児島県 1 件)(国土交通省情報：9 月 14 日現在)。

避難状況に関して、避難指示が 1 市 1 町(179 世帯 408 名)、避難勧告が 2 市 1 町 1 村(883 世帯 2,091 名)(消防庁情報：9 月 14 日現在発令中のもの)。避難所数は 13 箇所、避難者数は 471 名(9 月 14 日現在)。最大時では避難所数 855 箇所、避難者数 183,882 名(4 月 17 日時点)。

※災害情報は内閣府 HP(9 月 14 日)から引用



### 3. 活動報告

#### (1) 全体行程

##### 【9月6日(火)：移動・現地での打合せ】

- 08:00 盛岡駅 発  
14:00 あそ熊本空港 着  
15:00 熊本県立大学 着  
→熊本県立大学の学生と合流  
15:50 熊本県立大学 発  
16:20 益城町総合体育館 着  
→「よかましきハウス」にて打合せ  
18:40 益城町総合体育館 発  
19:10 熊本県立大学 着  
→参加者内での活動調整などの共有  
20:20 熊本県立大学 発  
21:00 東横イン 着



##### 【9月7日(水)：フィールドワーク・オリエンテーション】

- 08:30 東横イン 発  
09:30 益城総合体育館 着  
→打合せ  
10:20 熊本県立大学 着  
→オリエンテーション準備  
13:30 昼のオリエンテーション 開始  
14:50 熊本県立大学 発  
→益城町内をフィールドワーク  
16:00 益城町 発  
17:00 豊野少年自然の家 着  
20:30 夜のオリエンテーション  
22:00 就寝



## 【9月8日(木) : 活動日1日目】

07:30 朝のオリエンテーション  
08:00 熊本県立豊野少年自然の家 発  
→2グループに分かれて活動

### 益城町総合体育館グループ

08:40 益城町総合体育館 着  
10:20 よかましきハウスのお手伝い  
13:00 活動終了・益城町総合体育館 発  
→木山仮設団地グループに合流

### 木山仮設団地グループ

09:00 木山仮設団地 着  
09:30 サロン会場設営・住宅訪問  
13:00 サロン活動開始  
15:00 サロン活動・住宅訪問終了  
15:40 木山仮設団地 発

16:00 益城町総合体育館 着  
→訪問活動の情報共有  
16:40 益城町総合体育館 発  
18:00 熊本県立豊野少年自然の家 着  
20:30 夜のオリエンテーション  
22:00 就寝



## 【9月9日(金) : 活動日2日目】

07:40 豊野少年自然の家 発  
09:40 益城町総合体育館 着  
→木山仮設団地グループと分かれる

### 益城町総合体育館チーム

10:00 イベント手伝い  
13:00 カラオケ大会で交流  
15:00 終了・会場片付け

### 木山仮設団地チーム

10:00 木山仮設団地 着  
10:30 サロン活動、訪問活動  
12:00 広安西小チームと分かれる  
15:50 サロン活動、訪問活動終了  
16:00 木山仮設団地 発

### 広安西小チーム

12:50 広安西小学校 着  
13:00 子ども遊び支援  
17:15 広安西小学校発

18:00 豊野少年自然の家 着  
20:30 振り返り  
22:00 就寝



## 【9月10日(土) : 活動日3日目】

- 08:00 豊野少年自然の家 発
- 09:00 木山仮設団地 着
- 10:00 お茶っこサロン、訪問活動 開始
- 13:00 お茶っこサロン、訪問活動 終了
- 13:30 木山仮設団地 発
- 14:00 熊本県立大学 着  
→訪問活動の情報共有
- 16:00 熊本県立大学 発
- 17:00 豊野少年自然の家 着
- 20:30 振り返り
- 22:00 就寝



### 【9月11日(日)：修了式・解散】

- 08:00 退所点検
- 08:30 これからにつなぐ時間  
→プロジェクトの振り返り  
→情報共有会（「学生として」何ができるのか？）
- 10:30 修了式
- 11:30 豊野少年自然の家 発
- 16:20 あそ熊本空港 発
- 18:00 東京駅 発
- 22:27 盛岡駅 着  
→解散



## (2) 各日の活動内容、感想

## 【9月6日（火）】

### ・活動内容

避難所となっている益城町総合体育館に隣接する「よかましきハウス」(普段避難者の方々が交流するスペースとなっており、サロン会場や様々なイベントに使われている施設。9月17日に撤収済み)にて打合せを行った。

今回の打合せでは「子どものエンパワメントいわて」の石井 布紀子さん、「熊本 YMCA」の秋寄 光輝さん、「よかましきハウス」館長の眞田 昇さん、副館長の宮崎 律子さん、東京家政大学の齋藤 正子さん、熊本県立大学の学生、職員5名と岩手チーム4名で実施し、2日目以降の活動調整や応急仮設住宅への訪問活動を実施する際の注意点などを話し合った。

益城総合体育館を出発した後は一度熊本県立大学に戻り、熊本県立大学の学生・職員と一緒に活動先や時間などの調整・確認を行った。

### ・学生からの感想

私は5月に益城町へ訪れ、今回が4ヶ月振りの訪問であったが倒壊した家屋がそのままの状況であり、時間が止まっているかのような感覚を覚えてしまった。しかし、現地の方から「応急仮設住宅がほとんど完成に近づいている」、「被災者同士のつながりを強く感じるようになった」などの話を聞いた。また、同時に避難所で犯罪が発生したなどの話も聞き、良くも悪くも少しずつ被災者の方々の心境も変化しているように感じた。

決して長期間の滞在ではないが、少しでも熊本に残せるものを作れるよう今後の自分達の関わり方などを意識しながら頑張っていきたい。



避難所や仮設団地の情報などを共有



大学で活動先の調整、行程を確認

## 【9月7日（水）】

## ・活動内容

本日は全国から来た学生が全員合流する日となり、熊本県、福岡県、宮崎県、高知県、島根県と様々な地域から 19 名の学生が集まった。

昼のオリエンテーションでは「くまもと GINGA-NET プロジェクト」の概要説明や熊本県立大学の学生から震災当時の状況や大学生の活動について全員で共有しました。その後は熊本県立大学の学生の案内で活動場所となる益城総合体育館や益城町内を巡回して、被害の状況や当時の様子を説明していただいた。

夜のオリエンテーションでは「NPO 法人いわて GINGA-NET」八重樫綾子氏から「いわて GINGA-NET プロジェクト」での事例を基にお茶っこサロンの意義や学生が活動していく可能性などを教えていただいた。最後は明日から始まる活動の振り分け作業を行った。

## ・学生からの感想

今日はプロジェクトに参加する学生が初めて合流する日となりましたが、何度か熊本を訪れた方もいれば初めて熊本に来た方もいて、1人1人が色々な想いをもって参加しているのだと思った。益城町内の巡回では熊県生が案内をしてくれたことで、見るだけではわからない情報を知ることができ、地元学生の存在の大きさを感じた。

明日から本格的に活動に入りますが、オリエンテーションで教えていただいたノウハウなどを参考にしつつ、現場では臨機応変に行動できるように意識していきたい。



参加学生同士で自己紹介



模造紙を使って活動先の振り分けを行った

【9月8日（木）】

## ・活動内容

益城町総合体育館と木山仮設団地で2グループに分かれて、それぞれの活動を行った。「益城町総合体育館グループ」は主によかましきハウスで行われた太極拳教室、昼食用のおにぎり作りのお手伝いを行った。「木山仮設団地グループ」はお茶っこサロンの開催と訪問活動を行った。お茶っこサロンでは木山仮設団地の談話室を借りて、住民の方とお茶菓子を食べながら、震災当時の様子や応急仮設受託の暮らしについてなどの傾聴活動を行った。訪問活動ではお茶っこサロン開催の案内をしながら、家族構成や生活上の不安などの聞き取りをした。その後、「よかましきハウス」で合流し、傾聴活動や聞き取りで得た情報を調査票に書き写す作業を行った。8日は2人1組の4チームで訪問活動を行い、32件訪問した(不在宅を除く)。

夜のオリエンテーションでは各活動の振り返りと自己紹介等の交流を行った。

## ・学生からの感想

私は木山仮設団地グループで住宅訪問を行ったのですが、木山仮設団地ではほとんどの方が明るく過ごしているように感じた。多くの方が避難所での生活と比較しても満足 of いく暮らしができているとおっしゃっていたが、仮設団地に引っ越してきたばかりでありあまり交流ができていないと感じる方もいた。同じ仮設団地でも感じ方に大きく差が生じていることがわかった。活動時間以外も学生同士で震災についての情報共有やこれからの活動について語り合い、意識を深め合うことができた。

本日の活動ではそれぞれの学生の目標や活動参加の動機を共有し、これからの活動の意識を深めることができたと思う。



装飾しながらサロン会場を設営



聞き取りで得た情報を調査票に書き込む

**【9月9日（金）】**

## ・活動内容

益城総合体育館チームは「益城町つどいの広場とんとん」のとんとん講座の手伝いと「よかましきハウス」でのカラオケ大会の補助、参加者との交流を行った。木山仮設団地チームは昨日と同じく談話室を借りてお茶っこサロンの開催とお茶っこサロンのチラシを配りながら、一軒ずつ訪問活動を行った。その後、「よかましきハウス」にて傾聴活動や聞き取りで得た情報を調査票に書き写す作業を行った。9日は2人1組6チームで訪問活動を行い、50件訪問した(不在宅を除く)。広安西小学校チームでは午後からの活動となり、小学校の昼休みに子ども達と一緒に遊んだ。後半は支援物資として送られてきた学習用ゲーム機の使用準備等の作業を行った。また、最後には広安西小学校校長の井手文雄氏から避難所運営についてお話を聞かせていただいた。

## ・学生からの感想

昨日はご高齢の方と交流する機会が多かったが、今日は子どもと接する機会もあった。木山仮設団地では高齢者だけではなく、子どもやその子どものお母さんなどへの支援も必要だと感じた。

広安西小学校での活動では、自分が想像していたよりも数倍子ども達が元気で、とても驚いた。たくさんの学生ボランティアを受け入れている小学校なので子ども達も遠慮する様子もなく、最初から最後までずっと遊んでいた。また、校長先生から聞いた当時の避難所運営のお話は、リアルな様子に聞いていた学生全員が夢中になっていた。中でも、内閣制のお話は避難所だけでなく組織運営の点でとても興味深かった。「幸せ倍増大臣」や「爪切り大臣」など、ユニークな役職を作ることによって笑顔を増やすこと、ちょっとしたことで大臣に任命して責任感を持たせて1人1人が自分の判断で動くことなど、工夫に工夫を重ねていることがわかった。



住民からの要望で一緒にラジオ体操も行った



昼休みは子ども達と一緒に交流した

【9月10日(土)】

## ・活動内容

プロジェクトの参加学生全員で仮設団地でのお茶っこサロン、訪問活動を行った。土曜日で学校も休みということもあり、お茶っこサロンには子ども連れのお母さんが多く参加した。参加者の年齢層も考慮し、射的や塗り絵ができる遊びコーナーを設けた。また、住民の方から折り紙の折り方などを子ども達や学生と一緒に教えてもらうなど、住民同士の交流があった。お茶っこサロン、訪問活動を終えた後は熊本県立大学にて傾聴活動や聞き取りで得た情報を調査票に書き写す作業を行った。10日は2人1組7チームで35件訪問した(不在宅を除く)。

夜の振り返りでは、これまでの活動内容の感想等を共有し、今後の支援活動について意見交換会を行った。

## ・学生からの感想

訪問活動では不在の家も多かったものの、今日で仮設団地の部屋を全て回ることができた。全体的な感想として、身体の具合や交通手段など様々な生活事情があり、一人ひとりで異なる課題を抱えていることがわかった。初めて訪問活動を行う学生もいて最初は慣れない点もあったが、徐々に話の聞き方などもわかるようになり、住民の方と顔見知りになる学生もいた。

お茶っこサロンでは土曜日のため、子どもが多く来ると予想して、事前に遊びスペースを準備することができたので良かった。住民の方自らが折り紙を持ち寄り、折り紙教室が行われたので少しずつ住民同士の繋がりも出来てきたのではないかと感じた。

夜の振り返りでは、3日間の活動を通して今後も長期的な支援活動の必要性を感じ、岩手の学生も距離は遠くてもこれからも関わり続けていく大切さを実感した。



多くの子ども達が自転車で談話室に訪れた



今後の支援のあり方を全員で共有

【9月11日(日)】



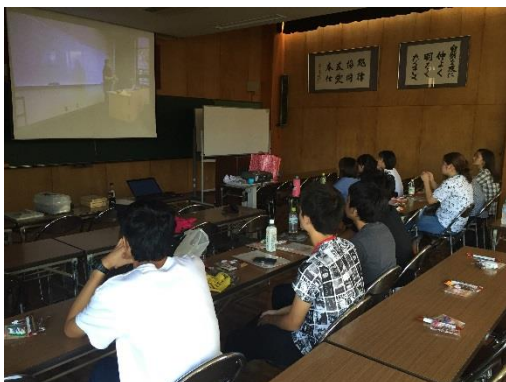
## ・活動内容

「これからにつなぐ時間」として、これまでの活動の振り返りや今後学生ができることを話し合った。各大学の学生が混ざるようにグループ分けを行い、「コミュニティ支援のあり方」、「ボランティアに参加しやすい環境づくりとは」、「熊本県内の学生ネットワークの連携の在り方」の3つのテーマについて情報共有や意見交換を行った。「コミュニティ支援のあり方」については、「コミュニティ形成活動を行う際、積極的にコミュニティに参加する人、コミュニティに参加しづらく孤立しがちな人によってアプローチの仕方は異なる。活力があり、よそ者の大学生だからこそ地域の輪を広げられる。」などの意見がでた。「ボランティアに参加しやすい環境づくり」については、「継続的な活動にする為には100%の善意だけでは参加側も運営側も続かない。仲間と一緒に活動する楽しさや経験から得る学びなど参加者へのリターンを実感してもらえよう工夫が必要。」などの意見が出た。「熊本県内学生ネットワークの連携のあり方」については、「現在、熊本県内の大学がそれぞれ個別に活動しているため、うまく連携が図れていない。学内だけでなく、他大学の学生と交流できる機会を作っていければ、互いの情報交換や各大学の特徴を活かしたコラボ企画を実施できる。」などの意見が出た。

## ・学生からの感想

今回は「①コミュニティ支援のあり方」、「②ボランティアが参加しやすい環境づくり」、「③熊本県内学生ネットワークの連携のあり方」のテーマに分かれて話し合った。熊本地震への今後の支援活動について話し合っていたのですが、アイデアや考え方はどの地域でも活かせるようなものばかりだった。

今日でくまもと GINGA-NET プロジェクトは終了となるが、今後も岩手でできることを行っていきたい。



活動写真を見ながら活動の振り返り



熊本県立大学の学生から今後の想いを発表

## 4. 学生からの感想



**岩手県立大学**  
**ソフトウェア情報学部 2年**  
**池之上 慎哉**

熊本、福岡、宮崎、高知、島根、岩手から多くの大学生が集まってボランティア活動と情報共有を行ない、かけがえのない経験をすることができました。

1番被害の大きかった益城町ではまだまだ復興に時間がかかりそうです。多くの家屋が震災当時のまま残されていました。

私は主に木山仮設団地でお茶っこサロンと訪問活動を担当しました。仮設に住む方の多くが避難所にいたときより快適に明るく過ごせているとおっしゃっていましたが、今は足が悪く集まりに参加できないために避難所にいたときの方が全体的に協力的で楽しかったと言う声もありました。木山仮設団地には子どもたちの遊び場がほとんどないため、お茶っこサロンはたくさんの子供たちが来てくれて非常に和やかな場になったと感じました。

熊本でのボランティア活動はもちろんですが、全国の大学生が活動に対してどのような意識で取り組んでいるのかを知ることができたのは非常に大きな学びだったと思います。

初めてのGINGA-NETの参加で緊張していましたが、多くの笑顔と最高の仲間を得ることができ、今回参加できて本当によかったと思います。

**岩手県立大学**  
**総合政策学部 3年**  
**川原 直也**



東日本大震災以来の震度7を観測した熊本地震。ニュースを見た時、私はとても他人事のように思えませんでした。私はゴールデンウィークにも熊本県に訪れましたが、今回の「くまもと GINGA - NET プロジェクト」で益城町の風景を見た時に現在でも倒壊したままの家屋があるのを見て愕然としました。

今回の活動は瓦礫撤去ではなく、人に寄り添う支援活動でした。訪問活動では単純に「大丈夫ですか？」と聞いても、ほとんどの方は「大丈夫です」としか答えません。しかし、仮設住宅の暮らしの様子や趣味の話をつつくりと時間をかけて聞いていくことで、ポロっと「実は…」と本音を言ってくれました。お茶っこサロンでは震災のストレスを吐き出す場でもありましたが、同時に住民同士を繋ぐ場でもありました。真剣な表情で当時の事を話していた方が子どもの笑顔を見るとつられて笑顔になりました。また、仮設団地には裁縫が得意な人、収納上手な方など色々な特技を持った方がいらっしゃるので、ボランティアが支援す

るだけでなく住んでいる人同士で助け合い、つながりを生むきっかけづくりになったと思います。人との関係性を作るというのは簡単なことではありませんが、今後の復旧・復興に向けて一番大切な要素だと思いますし、今後も現地で支援活動を継続していく学生にはその視点をぜひ大切にしてほしいです。

プロジェクトに参加する当初は「東日本大震災の経験から得たノウハウを伝える」という気持ちでいて、熊本への支援活動も今回で一区切りつけようとしていた自分がいました。しかし、熊本の現状を見て、現地の方と話していると区切りをつけようと思う気になれませんでした。どんなに頑張っても岩手と熊本との距離が短くなることはありませんが、自分の地元で現状や震災の教訓を伝える等、現地に行けなくてもできることがあるというのは、東日本大震災で支援に来てくれた全国の仲間達が実践して証明してくれていますし、今度は自分達が実践する番です。

今回、「くまもと GINGA-NET プロジェクト」に参加できて多くの学びを得て、同じ思いを持って活動する学生が全国にたくさんいることを知りました。自分も負けないう頑張っています！

がまだす、熊本！

岩手県立大学  
社会福祉学部 4年  
小笠原 果美



今回私は、2度目の熊本での活動でした。1度目は震災発生から2週間経ったゴールデンウィークに南阿蘇村に入りました。当時は、避難所に大勢の方が避難しており、災害ボランティアセンターが立ち上がって動き始める段階でした。そこから約4ヶ月。熊本の益城町では、応急仮設住宅への入居が始まる一方、公費での住宅解体は順番待ちで、震災直後とほとんど変わらない風景が広がっていました。その益城町での活動について、振り返ります。

私は主に、2つの活動に携わりました。1つ目は、木山仮設団地でのお茶っこサロンの活動です。木山団地は、鍵の引渡しからちょうど1ヶ月経った段階で、入居して1ヶ月経つ方もいれば、現在引越し作業をしているという方もいて、外部の支援団体もまだ入っていない状況でした。合計3日間のお茶っこサロンで私が特に感じたことは、子どもたちの遊び場が全くないことと、避難所コミュニティの存在の大きさです。まず、木山団地は周囲を田んぼに囲まれており、団地内に遊具や広い空き地などなく、車が頻繁に行きかっています。お茶っこサロンに来た子どもたちは、疲れを忘れたかのように遊んでいました。岩手で活動しているときに会った子どもたちと重なる部分も多く、遊び支援が必要だと強く思いました。また、お茶っこサロンでは、「私は直後から自分でアパートを借りて避難していたから、ここには知り合いがいないんだよね…」と話してくれた方がいました。ほかにも、親戚のお

家にいた方もおり、大規模な避難所コミュニティがあったからこそ、仮設団地でもていねいにコミュニティ支援を行う必要があると感じました。

2つ目の活動は、広安西小学校での活動です。こちらの小学校は避難所運営に教員が積極的に関わったことで有名であり、「内閣制」といって、「交通大臣」や「爪きり大臣」「サロン大臣」を置くなど、ユニークな運営を行っていました。子どもたちとめいっぱい遊んだり、支援物資の学習ソフトの初期設定を行ったりと、午後の限られた時間で活動は少なかったのですが、校長先生からのお話は、とても印象的でもう1時間も2時間も聞いていたくなるほど興味深いものでした。福祉を勉強している学生として、こうした避難所運営や校長先生の心構えは、忘れず頭に入れておきたいと思います。

今回、多くのご縁と皆様からのご支援によって、再び熊本に行き、活動することが出来ました。全国の報道で熊本について取り上げることはほとんどなくなりましたが、益城町では今もなお、復旧に向けて奮闘している状況だということ目の当たりにしました。同時に、1人でも多くの人にこの事実を伝えなくてはならないと思いました。支えてくださった皆様に感謝申し上げるとともに、この報告書が、多くの人の手に渡り、多くの人に見てもらえることを心より願っています。

## 5. メッセージ

熊本県立大学  
総合管理学部 3年  
岩崎 貴夏也さん

くまもと GINGA での活動は、震災を見つめ直すよい機会となりました。私にとって熊本は大切な故郷です。しかし、今回活動に参加した県外の学生の多くは、熊本に特別な縁があった訳ではありません。被災地の学生としては頭が下がる思いであったと同時に、負けてはいられないと大いに刺激になりました。

学生にはできないことが多いが、学生にしかできないこともあります。社会の緩衝材としての役割、若者のネットワークなどは、学生の強みだと活動を通して再認識しました。

学生に何ができるのか。そのことはしっかりと学ばせて貰いました。

では、地元の学生は何ができるのでしょうか。我々は次にこの視点が必要です。今回の経験が、また一つ違う視点で震災を見通すきっかけとなりました。その意味で私にとって、くまもと GINGA で出会えた学びは幸運でした。今後も熊本の1日も早い復興を目指し、活動を続けていくつもりです。

北九州市立大学  
文学部 3年

## 前田 謙さん

サロン活動と個別訪問を通して学んだことは様々ありますが、なかでも、「こちら側が“おもてなし”と思っている言動も、ほんのふとしたことで“おせっかい”になってしまうこと」を忘れてはならないと改めて思います。

また、我々外部ボランティアが、できる限り「受け入れ側（くまもと）の負担を減らすこと」を心がける。そのことの必要性も痛感しました。接する相手を見て、目に見えないものを顕在化させ、語り得ぬモノを聴き出すことができると我々自身にとっての今後にもつながると思います。あくまでも今回の「くまもと GINGA」は次回以降も継続して学生を派遣し、支援していく“きっかけ”だと考えています。今回参加した学生は私自身を含め「まだまだ何かやれるはず、やらなきゃいけない」と強い想いを抱いているように感じました。

## 宮崎公立大学 人文学部 3年 有水 勇登さん

くまもと GINGA に5日間参加した私は、自分の五感を精一杯使って熊本県の「いま」を実感することができました。仮設住宅にご在宅の方々や小学校の校長先生のお話を伺うと、まだまだ多様なニーズがあり、ボランティアの力が大いに必要だと痛感しました。さらに、県外からの学生たちと交流し、話をする中で、「ボランティアは継続してなんぼ」ということに改めて気づきました。私たち自身が継続してボランティアに参加できるのが理想ではありますが、現実的に難しいものがあります。そうなった時に、まだボランティアに参加したことのない学生にいかに関心を持ってもらうかが課題だと考えます。また、私の住んでいる宮崎県でボランティアに関する学生間、あるいは学校間のネットワークの繋がりを持つことも、いざという時に必要なのではないか、と思います。今回参加したことで、新たな気づきや経験、新しい仲間を得ることができました。この得たものを宮崎県の多くの方に、発信していきたいです。

## 高知県立大学 文化学部 2年 西明 映美さん

今回、くまもと GINGA に参加させていただいて、熊本に実際に行ってみて、自分の目で見て、被害の大きさを改めて実感しました。凸凹の道や、倒壊した民家、未だに瓦が乗っておらずブルーシートがかかったままの屋根など、ニュースで見る熊本と、自分の目で見る熊本は全く違っており、とても衝撃を受けました。また、仮設住宅におられる方々のお話を聞く

中で、将来への不安などを抱えておられる方もいて、すごく切ない気持ちになりました。しかし同時にそんな状況の中でも、前向きに生活しようとしている方々や、笑顔の輝く子ども達もいて、こちらも元気を貰いました。

色々な県や大学から参加している様々な思いを持つ人達と活動する中で、少しだけ自分の中で何かが変わった気がします。まずは、伝えること。伝え、考え、被災地の為に何が出来るか、模索し続けたいと思います。

## 熊本県立大学

### COC 推進室 特任准教授

#### 野口 慎吾先生

最初のきっかけはゴールデンウィークに本学を訪れた小笠原果美さんとの出会いでした。その後、学外とのつながりがあまり無い状態でしたが、7月に「コミュニティ支援養成研修会」を実施し、「熊本県立大学 学生ボランティアステーション」が誕生しました。

「くまもと GINGA-NET プロジェクト」は、九州内外の学生が出会い、ふれ合い、分かち合う場となりました。お茶っこサロンなどのコミュニティ支援のノウハウを学び、一日の活動の振り返り等は、学生同士が交流を通して思いを共有することでできた大変貴重な時間であったと思います。

今回、参加者された皆さんの熊本復興を願う熱い思いを胸に、まだ思いをカタチにできていない学生達をどう巻き込んでいくか、学生達と一緒に行動しながら考えていきたいです。大変、お世話になりました。この場を借りて、感謝申し上げます。





支援活動に向かう(左から)池之上慎哉さん、川原直也さん、小笠原果美さん

25日は、県立大社会福祉学部4年小笠原果美さん、総合政策学部3年川原直也さん、ソフトウェア情報学部2年池之上慎哉さん、八重樫代表が同大で活動内容を確認した。

鹿児島県鹿屋市出身の池之上さんは「熊本に進学した友達が発信し、いてもたってもいられなかった。被災者の力になりたい」と意気込む。

大学の先遣隊として5月に南阿蘇村に向いた小笠原さんも「今までの経験を生かす機会にする」と強調する。

活動は、学校や仮設住宅での子どもの学習支援や、仮設住宅へのサロン開設を想定。日本財団などから150万円の助成を受けた。同法人は東日本大震災

# 熊本支援に学生の力

## いわてGINGA-NET現地派遣へ

### 本県3人「経験生かす」

NPO法人いわてGINGA-NET(八重樫綾子代表)は9月7〜10日、熊本県被災地の益城町などで支援活動に取り組む。九州地方などから大学生約30人を募り、本県からも県立大生3人が参加。東日本大震災後、支援活動に県外学生を派遣する中間支援を担ったノウハウを生かし、熊本の力になりたいと願う学生たちを支援する。

後、延べ1万6千人の県外学生を被災地に派遣。住民や関係団体とネットワークをつくり、「力になりたい」と願う全国の学生と被災地を結んだ。

今回は福岡、宮崎、高知などの大学生約30人を105団地4202戸の仮設住宅を整備する熊本県へ派遣する。

同法人は、本県の3人の移動費を募っている。1口千円から、郵便振替口座02260-6-113430「NPO法人いわてGINGA-NET」へ。

## 7. 活動協力者紹介

**【活動先協力機関、団体】**

- ・ 公立大学法人熊本県立大学 防災減災プロジェクト
- ・ 熊本 YMCA 災害対策本部
- ・ 益城町立広安西小学校
- ・ 熊本市立月出小学校
- ・ よかましきハウス
- ・ NPO 法人子育て応援おおきな木

**【寄附、募金活動にご協力していただいた団体・個人の皆様】**

・ 団体

株式会社 川徳友の会 様

株式会社 富士モーターサービス 様

いわてヤングフェスティバル実行委員会 様

・ 個人

石堂 淳 様

菅野 道生 様

佐々木 篤 様

佐々木 民夫 様

中村 淳一 様

中村 慶久 様

梨子 真実 様

根本 賢一 様

日開野 博 様

樋澤 里保 様

本田 綾子 様

諸岡 眞太郎 様

山本 督憲 様

多くの個人のみなさまからの御寄附、募金箱設置許可をしてくださった各機関の関係者様、私たちの活動を紹介してくださった新聞社のみなさまにも感謝申し上げます。



**“ドナベは地域交流のツールだ！”**  
**「第2回くまもと GINGA-NET プロジェクト」**  
**活動報告書**



**特定非営利活動法人 いわて GINGA-NET**

**「くまもと GINGA-NET プロジェクト」いわて学生チーム**

**平成 29 年 3 月**

## 目次

1. 「第2回くまもと GINGA-NET プロジェクト」概要
2. 「熊本地震」被害概要
3. 活動報告
  - (1) 全体行程
  - (2) 各日の活動内容、感想
4. 学生からの感想
5. メッセージ
6. 掲載新聞記事
7. 活動協力者紹介

## 1. 「第2回くまもと GINGA-NETプロジェクト」概要

(1) 活動期間 2017年3月17日(金)～3月21日(火) 4泊5日

日 程	内 容
3月17日(金)	前日入り 熊本県立大学他、関係者打合せ
3月18日(土)	熊本県立大学他、関係者打ち合わせ 物品購入
3月19日(日) 13時集合	■熊本県立大学 集合 オリエンテーション
3月20日(金)	活動日 交流会「DoNabeNet in くまもと」 ■テクノ仮設団地 解散

(2) 活動地域 熊本県益城町とその周辺地域

(3) 宿泊場所 熊本県立豊野少年自然の家(熊本県宇城市豊野町山崎1775)

(4) 主な活動 ・応急仮設住宅におけるサロン活動(DoNabeNet)

(5) 主 催 特定非営利活動法人いわて GINGA-NET

(6) 協 力 熊本県立大学学生ボランティアステーション  
ふくおか学生熊本地震支援実行委員会  
益城だいすきプロジェクト～きままに～  
岩手県立大学 他

(7) 参加者 大学生24名  
(右表:参加者の所属校一覧)

地方	学校名
熊本県	熊本県立大学
福岡県	福岡県立大学
	北九州市立大学
	久留米大学
	西南学院大学
宮崎県	宮崎大学
愛知県	日本福祉大学
岩手県	岩手県立大学

## 2. 「熊本地震」の概要

平成 28 年 4 月 14 日 21 時 26 分に熊本県熊本地方を震源としたマグニチュード 6.5(暫定値)の地震が発生し熊本県益城町で震度 7 を観測した。その 28 時間後の 4 月 16 日 1 時 25 分には同じく熊本県熊本地方を震源としたマグニチュード 7.3(暫定値)の地震が発生し、熊本県益城町と西原村で震度 7 を観測、津波注意報が発表された。

※災害情報は内閣府 HP(平成 29 年 3 月 14 日)から引用

### 【4 月 14 日 21:26 以降に発生した震度 6 弱以上の地震】

4 月 14 日	21:26	震度 7	熊本県熊本
	22:07	震度 6 弱	熊本県熊本
15 日	0:03	震度 6 強	熊本県熊本
16 日	1:25	震度 7	熊本県熊本
	1:45	震度 6 弱	熊本県熊本
	3:55	震度 6 強	熊本県阿蘇
	9:48	震度 6 弱	熊本県熊本

4 月 16 日 1 時 27 分に津波注意報発表。同日 2 時 14 分に津波注意報解除。4 月 15 日に気象庁が「平成 28 年(2016 年)熊本地震」と命名。

被害状況に関して、人的被害は死者 211 名(災害関連死含む)、負傷者 2,746 名。建物被害は全壊が 8,682 棟、半壊 33,660 棟、一部破損 152,794 棟、火災 16 件(消防庁情報：3 月 14 日現在)。土砂災害発生状況 190 件、そのうち土石流等 57 件(熊本県 54 件、大分県 3 件)、地滑り 10 件(熊本県 10 件)、がけ崩れ 123 件(佐賀県 1 件、長崎県 1 件、熊本県 94 件、大分県 15 件、宮崎県 11 件、鹿児島県 1 件)(国土交通省情報：3 月 14 日現在)。

避難状況(熊本県)は 4 月 17 日に避難所を 855 箇所開設し、最大避難者数 183,882 名記録した。平成 28 年 11 月 18 日をもって、県内全避難所を閉鎖した。現在の避難指示は 1 市 1 町(宇土市、御船町)で 179 世帯、408 名が対象となっている。避難勧告は 1 町 1 村(南阿蘇村、御船町)で、355 世帯、878 名が対象となっている。(消防庁情報：3 月 14 日現在)。



天井が落下した益城町総合体育館



崩落した熊本城の石垣

### 3. 活動報告

#### (1) 全体行程

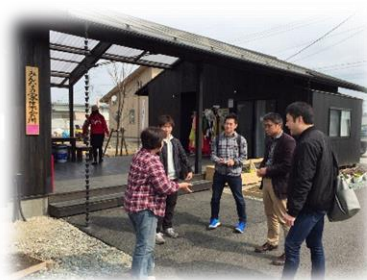
##### 【3月17日(金)：移動・現地での打合せ】

- 09:15 いわて花巻空港 発  
10:45 名古屋小牧空港 着  
13:00 阿蘇くまもと空港 着  
14:00 テクノ仮設団地 着  
→仮設商店街見学  
16:00 熊本県立大学 着  
→学生支援課の坂本課長へご挨拶  
18:00 テクノ仮設団地 着  
→Donabe 交流会の打合せ  
19:10 テクノ仮設団地 発  
20:00 ネストホテル 着



##### 【3月18日(土)：打ち合わせ・物品購入】

- 08:30 ネストホテル 発  
09:00 テクノ仮設団地 着  
→自治会長の吉村静代さんとの打合せ  
10:30 テクノ仮設団地 発  
→買い出し  
13:00 昼食  
14:00 阿蘇くまもと空港 着  
→石田、川原(千)と合流  
15:00 熊本城 着  
→視察  
17:00 関係者内での情報共有  
→いままでの打合せの共有、今後の動きの確認  
19:30 ミーティング終了  
20:00 夕食  
22:00 ネストホテル、スーパーホテル着



## 【3月19日(日) : 集合・オリエンテーション】

08:00 ホテル発

08:30 熊本県立大学 着

10:00 受付開始

→学生 24 名合流

10:30 あいさつ、オリエンテーション

11:30 熊本県立大学 発

12:00 テクノ仮設団地 着

13:00 昼食

13:30 研修会

16:30 テクノ仮設団地 発

→石田、日福の有賀は残って本日のドナベのための事前調理

17:40 豊野少年自然の家 着

→19:40 石田、有賀合流

20:00 参加学生間の交流会

22:00 就寝



## 【3月20日(月) : 活動日・解散】

08:45 豊野少年自然の家 発

09:20 テクノ仮設団地 着

09:30 鍋交流会の準備

11:00 交流会参加者、受付開始

11:40 交流会開始

12:45 交流会終了

13:00 まとめ・ふりかえり

15:00 修了式

16:00 解散



## (2) 各日の活動内容、感想

### 【3月17日（金）】

#### ・活動内容

熊本県に到着後、熊本県立大学にて学生支援課課長の坂本誠也氏にプロジェクト実施のご挨拶に伺った。

その後、テクノ仮設団地へ向かい、「みんなの家集会所・D」にて「益城だいすきプロジェクト・きままに」の柳井理美子氏と20日実施予定の交流会に関する打ち合わせを行った。会場の利用可能状況、参加者への周知方法、購入が必要な物品の確認などを話し合った。

#### ・学生からの感想

上空から熊本県の街並みを見た際、前回に比べると屋根をブルーシートで覆う家も一見少なくなったように見え、復旧が進んでいるのかと感じた。しかし、熊本県立大学の構内では現在でも修復が行き届いていない箇所があった。学生支援課の坂本氏によると資材高騰や人手不足等の理由で業者の落札ができない現状にあるという話や現在も応急仮設住宅から通っている学生がいる等の話を聞き、ハード・ソフト面でもまだまだ復旧段階の途上であると感じた。

テクノ仮設団地では様々なイベント、交流行事が開催されているようで、その度に自治会長の方が応急仮設住宅の入居者の方々への周知、外部支援者との連絡調整等を引き受けており、負担がかかっているように感じた。枠組みで言えば自分たちも同じく、イベントを持ち込む立場ではある。明日からの活動も地域の方々への配慮を第一優先に考えて、無理のないように実施していきたい。



仮設団地では様々な催しが行われていた



事前に交流会場となる集会所を確認

【3月18日（土）】

### ・活動内容

「益城だいすきプロジェクト・きままに」代表兼テクノ仮設団地Dブロック自治会長の吉村静代氏、メンバーの柳井理美子氏と当日のドナベ交流会の打合せを行った。仮設団地内で一番大きい「みんなの家集会所・B2」を使用させていただくことになり、本日は施設内の設備状況や広さ等を確認した。

その後、交流会で必要な物品や食材を購入し、阿蘇くまもと空港で石田、川原(千)と合流した。合流後はいままでの打合せ等の情報共有、当日の役割分担などを検討した。

### ・学生からの感想

プロジェクトに参加する4名の学生は岩手県立大学で募金活動を行っていたメンバーではあるが、合流した2名の学生は熊本県を訪れるのは初めてで、「今回の活動をきっかけに自分たちの活動の見直しにもつなげたい」と意気込んでいる。

私たちは熊本市視察の中で熊本城を訪れた。私は小学生の時以来約8年ぶりに熊本城を訪れたのだが、現在の熊本城は「平成28年熊本地震」により莫大な被害を受け、私の記憶に残っているものとは大きく異なっているように感じた。

明日は全国の学生が合流する日となる。それぞれの学生がそれぞれの想いを持って熊本県に集まると思う。共に活動できる時間は僅かだが、プロジェクトの成功のため精一杯頑張りたい。



吉村氏、柳井氏との打ち合わせを行った



当日に向けて情報共有・役割分担を決めた



【3月19日（日）】

### ・活動内容

本日、全国から来た参加学生24名が集まった。午前は熊本県立大学にてボランティアステーション、「わかもん復興プロジェクト」の学生から、震災当時避難場所となった熊本県立大学で行われた活動や現在の取組み等についてのお話を聞いた。午後は、テクノ仮設団地にて熊本県大特製大麦カレーをいただいた。また、研修会では「九州建築学生仮設住宅環境改善プロジェクト“KASEI”」のメンバーから、活動内容等についての話や、「益城だいすきプロジェクト・きままに」代表の吉村静代氏からコミュニティ形成についての話を聞いた。夜は、豊野少年自然の家にて参加学生との交流会、「DoNabeNet in くまもと」についての打合せ、役分け等を行った。

### ・学生からの感想

コミュニティ形成にて、同じ避難所で過ごした仲間が“大きな家族”として現在仮設住宅に移行してからも繋がりが残り、声を掛け合い、支え合える関係性が築けると言う話を聞いて、避難所からのコミュニティが困難を共にした仲間ということでもっと強いものになっているのだなと感じた。また、避難所から仮設住宅への移行の際、抽選で仮設住宅の場所を決めることにより生じる隣人の問題など、平等と住人の要望の合致が難しいところだなと思った。

初めてのくまもと銀河で少し緊張していたが、主に九州地方の学生と交流し、打ち解けることができたかと思う。本日のドナベで大成功を納められるよう、皆で協力していければと思った。



DoNabeNet の取組みを参加学生に紹介



参加学生同士で活動に対する想いを共有

【3月20日（月）】

### ・活動内容

前日にお話を伺ったテクノ仮設団地にて「お鍋交流会(ドナベ)」を行いました。学生は調理・会場準備・受付の係にそれぞれ分かれ、活動した。調理班は、時間配分などを考えながら、ひつつみ鍋・しし鍋・もつ鍋の三種類を作った。会場準備、受付班は、机やイスの配置だけでなく、参加者の方が見て思わず嬉しくなるような「はし入れ」を作ったり、事前に住民の方たちが来た時の事をシュミレーションしたりする等、学生のアイデアを活かしながら準備をした。交流会では一緒にお鍋を食べ、会話をしながら仮設団地の住民の方からさまざまなお話を伺った。

ふりかえりの時間では、はじめにそれぞれが前日に立てた目標についてふりかえり、グループで共有した。その後、地域・大学ごとの3つのグループに分かれ「DoNabeNet」について意見を共有した。

### ・学生からの感想

「岩手のドナベを伝える」という気持ちで今回のくまもと GINGA に臨んだが、正直事前(前日)の参加学生に向けた発表では、上手くドナベの良さ・魅力を伝えることができず、悔しい思いをした。しかし、実際に当日を迎え、その後の学生のふりかえりを聞くと、1人ひとりにドナベの魅力を体感してもらえた実感した。

「団地では踊りや演奏などのたくさんイベントが行われてきたが、今回の企画のような自分も本当に楽しみながら参加できるものは初めてで嬉しい。」、「あっという間だった。またこうして皆で集まりたい。美味しい鍋をありがとう。」等、参加して下さった住民の方からもたくさんの嬉しい言葉をいただいた。

その場所に合った形で、今後さらにいろんな大学・地域でドナベが広がっていけば良いなあと感じると共に、岩手県立大学のドナベもさらにより良いものにしていかなければならないと感じた。今回の経験での学びを岩手での活動にもつなげていきたい。



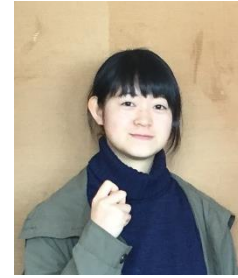
約60名での交流会となった



各地域で今後につながる振り返りを行った

#### 4. 学生からの感想

岩手県立大学  
看護学部 1年  
川原 千晶



1日目は研修会を行い、避難所生活の様子などなかなか聞く機会のないような貴重な話を聞くことが出来ました。熊本県立大学学生ボランティアステーションの学生からは、震災時に避難所となった熊本県立大学での当時の様子を聞き、避難所の運営を学生がすることの大変さを感じました。また、突然の事態で戸惑うことも多く、右往左往していたという学生の話聞いて、日頃から緊急事態に備えて準備や知識を得ておく必要があると学びました。研修会で特に印象に残ったのが、「益城だいすきプロジェクト・きままに」の代表の方からのコミュニティ形成についてのお話です。同じ避難所で過ごした人達は「大きな家族」として仲間意識が強く、現在仮設住宅に移行してからも声を掛け合え支え合える関係性が築けているそうです。避難所で培ったコミュニティを仮設住宅で活かし、自宅再建、公営住宅へ移行する際にも繋げて活かし続けることが出来るという話を聞き、避難所でのコミュニティ形成がいかに大切かを知ることが出来ました。しかし、仲間意識が強い分、違う避難所にいた初対面の人には仲間に入りづらく、仮設団地内でも孤立してしまうという課題もあり、難しい面も感じました。繋がりを持ち続けることも大切ですが、新しい場で新たにコミュニティを形成していくためにも、イベントなどで交流できる場を設け、コミュニティ形成支援をしていく必要があると大いに感じました。

2日目は、益城町のテクノ仮設団地内の集会所である「みんなの家」を会場とし、岩手県立大学学生ボランティアセンター発祥のDoNabeNetを行いました。私はDoNabeをするのは初めてでしたが、お鍋を囲んで仮設住宅に住む方々と楽しくお話ししながら交流でき、DoNabeの効果を実感することが出来ました。イベント事に参加しているのはいつも決まった顔だそうで、ここでもコミュニティ形成の問題を感じました。住民が主体的にDoNabeに参加できるよう、調理から手伝ってもらうなどの工夫が今後必要であると思いました。

今回、初めて岩手から遠く離れた地での活動で、少々不安もありましたが、九州の大学生達や仮設住宅に住む方々との交流、DoNabeNetの活動を通して、多くのことを学ぶことが出来ました。熊本で地震が発生した後、私は大学に入学してからすぐに行われた募金活動に参加し、また、第1回くまもと GINGA-NET の報告会を聞きに行くなど、熊本地震についてはもともと関心を持っていました。そして今回、現地に行って直接見聞きしないと分からないような現状や問題を知ることが出来たのはとても大きな収穫で、良い経験となりました。現地で見聞きして感じた事など多くの人に伝えることが出来たらと思います。そして、多くの人に熊本に関心を持ち続けてもらいたいです。

岩手県立大学  
社会福祉学部 2年  
石田 雪乃

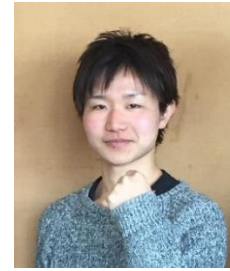


ニュース等の報道や、前回の活動に参加した方の報告でしか知ることのできなかつた熊本の現状を、今回自分の目で見ることができ、改めて「自分が出来ることは？やるべきことは？」と考えるようになりました。岩手での「DoNabeNet」の取り組みを熊本にも「伝える」という目的を持ちながら参加した第2回くまもと GINGA-NET プロジェクトでしたが、終えて振り返ってみると、一から伝えるというよりも、実践の中で参加者に伝わり、私自身も多くの学びを得ることが出来ました。熊本での DoNabeNet の活動を振り返るとともに、今後に繋げていくことを考えていきたいと思います。

今回の活動でお世話になった益城町テクノ仮設団地「みんなの家」は、広い仮設団地内の各ブロックに設けられている談話室・交流スペースのような場所で、岩手で見えるものとは少し異なり、外部からの様々なイベント(踊りや芸)が開催され、それを見に来る地域の方々もたくさんいて、賑やかで明るい印象を持ちました。お鍋交流会当日は、避難所運営の際に地元住民で結成された「益城大好きプロジェクト」の方や仮設団地の各ブロック長の方のご協力もあり、学生も含め約60名が参加し、学生が作った三種類の鍋を味わいながら、熊本での暮らしについてや、それぞれの地域の名物について等、様々な会話で盛り上がりました。「今までのイベントは見るのばかり。ゆっくり食べながら、話をできるのは初めてで楽しい。」と一緒に食べていた方が言いました。「足が悪くて、来るのが大変だけど来て良かった。美味しい鍋、ごちそうさま。」と言って下さった方もいました。初めてテクノ仮設団地を訪れた時、賑やかで明るい印象を受けましたが、直接いろいろな方とお話する中で見えてくる課題や、気持ちを知るきっかけになりました。事前に参加学生に岩手での DoNabe の取り組みを紹介した際、十分に魅力や地域にもたらず効果を言葉で伝えることはできませんでしたが、参加学生からも「一緒に鍋を食べるだけのように感じるけれど、何気ない会話からだんだん地域の方との距離が縮まっていくように感じた。」といった感想を聞き、言葉よりも実際にやってみたことで、お鍋から始まるつながりの魅力が伝わったと感じます。DoNabe は場所だけでなく、関わる学生や地域の方次第でどんどん良く変化していく活動だと考えています。岩手では既に20回以上開催していますが、参加者の固定化や広報不足等の課題も多くあります。熊本での活動を経験し、学生の発想を地域の方と共有していく大切さを学び、今よりも多くの方に DoNabe の活動を広げていきたいと思います。

最後に、今回の熊本での貴重な学びの機会を与え、支えてくださった多くの方々に感謝し、まとめといたします。ありがとうございました。

岩手県立大学  
ソフトウェア情報学部 2年  
池之上 槇哉



平成28年熊本地震から一年が経ちました。九州出身の私にとって熊本地震は非常に衝撃的な出来事でした。震災直後の私は募金活動とSNSでの情報発信を行っていたのですが、現地に出向いて人の力になりたいという想いがありました。そんな中9月に「くまもとGINGA-NET」の活動を知り、九州を中心に全国から多くの大学生が集まりボランティア活動と情報共有を行いました。そして3月、「第2回くまもとGINGA-NETプロジェクト」が行われました。

プロジェクトの前日に岩手県立大学の学生で現地視察として熊本城を訪れました。私は小学校の修学旅行以来約8年ぶりに訪れたのですが、現在の熊本城は震災により石垣や建物が莫大な被害を受けており、私の記憶に残っているものとは大きく異なっていました。完全な復旧・復興までには20~30年はかかるということを知り、震災の影響を再認識しました。

プロジェクト1日目に益城テクノ仮設団地で避難所運営やコミュニティ形成、まちづくりを住民指導している「益城だいすきプロジェクト・きままに」、九州の大学生が行なっている「Kasei（九州建築学生仮設住宅環境プロジェクト）」や「わかもん復興プロジェクト」等の各団体の活動報告を聞きました。益城テクノ仮設団地はA~Fでブロック分けされているのですが、どの団体も各ブロックが抱えている課題や住民の悩みを把握していて非常に驚かされました。

「DoNabeNet in くまもと（お鍋交流会）」当日は鍋を食べながら参加者の方々から様々なお話を伺いました。その中で特に印象に残ったのは「住民の繋がり」についてです。益城テクノ仮設団地では様々な地域からボランティアや学生団体が訪れて頻繁にイベントを開催しているのですが、「見たり聞いたりするだけで住民同士交流できるイベントが少ない」という声がありました。益城テクノ仮設団地は県内最大規模でコミュニティに関して幾つか課題があるそうです。前回のくまもとGINGA-NETの活動では木山仮設団地を訪れたのですが、同様の問題を抱えていました。

住民の方々から震災により生活に大きな変化を受けたと聞き、その中で住民同士がどのようにしてコミュニティを形成していくかが重要だと感じました。岩手の学生が熊本の仮設団地のコミュニティ形成に直接関わることは難しいですが、今回九州の学生に「DoNabeNet」の活動を伝えたように、間接的にでも何か役に立てることをしていきたいです。

岩手県立大学  
総合政策学部 3年  
川原 直也



飛行機から熊本県の街並みを見下ろした時、屋根を覆っているブルーシートが前回訪れた時に比べると少なくなり、一見復旧工事も進んでいるように感じましたが、いざ自分の足で街を歩けば至る所に修復されていない箇所を見かけ、地元の方の話を聞くと現在でも精神的なショックを抱えており、震災の爪痕は今でも大きく残っていることを実感しました。

今回、DoNabeNet(以下、DoNabe)を実施した「テクノ仮設団地」は県内では最大規模で市街地からも離れており、抽選で外れてしまった方も少なくありませんでした。その為、集落・地区単位で入居した仮設団地よりも一層コミュニティ形成の重要性が叫ばれていた仮設団地でもありました。そんな中、DoNabe を実施した当日は雨模様だったにも関わらず、集会所である「みんなの家」にたくさんの方々が参加してくださいました。プロジェクトの参加学生も一人ひとり主体的に準備・進行をしており、地域の方からも「見るだけ、聞くだけといった参加ではなく、自分も楽しめて参加できて良かった」という声もありました。この言葉から一方的に支援する・されるの関係ではなく、一緒になって“場”を作ることが大切だと実感しました。

一方、孤立を防ごうとするあまり自治会がイベント疲れしている話を聞いたり、4月に熊本県の仮設団地でも孤独死された方が発見された悲しいニュースが流れたり、現地では難しい問題が数多く存在します。その問題を解決する明確な答えはありませんが、やはり丁寧の一つ一つの取り組みを地道に積み上げていくことが、遠回りのようで一番の解決策なのではないかと思います。そして、今回一緒に参加した学生達を見て、その取り組みを応援することができる学生がたくさんいることもわかりました。岩手県立大学から始まり全国に広まりつつある DoNabe ですが、既存のやり方に捉われることなく、地域や学生チームの現状を考慮しながら、熊本独自の方法で活動を展開してくれることを期待しています。

今回の「第2回くまもと GINGA-NET プロジェクト」は岩手県立大学から交通費・宿泊費など金銭面でサポートしていただき、その他たくさんの方々からご支援をいただきました。プロジェクトに参加した学生は、今回の経験を個人個人の学びとして終えるのではなく新たなアクションとして次に繋げ、多くの方に発信していく責任があります。その為にも、今回参加した学生だけが行うのではなく、より多くの方を巻き込み、「岩手県立大学」という一つのチームとして今後も熊本県を応援していく仕組み作りをしていきたいと思っています。

※学年はプロジェクト参加時の学年を記載しております。

## 5. メッセージ

熊本県立大学

総合管理学部 1年

村上 明里さん

突然の地震に遭い、被災地で活動した経験のない私達は「仮設住宅での活動」など、右も左も分からない状態でした。「何かしたい」という思いだけを持って、前回のくまもと GINGA に参加させて頂き、サロン活動のいろはを学びました。そこで得た経験を活かそうと、その後の炊き出し活動等の活動に繋げていったのだが、段々と活動内容がマンネリ化し、回数も徐々に減った状態となりました。

そんな中で今回の第2回くまもと GINGA において、土鍋を用いたカフェ活動の方法を学び、土鍋が住民の方々との会話の手助けとなる素晴らしいツールであると感じたことで、自分達でも取り組みたいと思いました。また、全国から来て下さった学生の行動力とアイデア力から良い刺激を受けたことや、何より住民の方が喜んでくださったことで、再び自分の中でエンジンがかかり、定期的な仮設住宅でのカフェ活動へと繋げていこうと強く決心できました。

北九州市立大学

文学部 3年

前田 謙さん

私自身、2016年4月の熊本地震発災後、複数回熊本県を訪れており、そのたびに感じることは「自分たちごときに何ができるのだろうか」「やりたいことをやっているだけになっていないだろうか」ということです。くまもと GINGA-NET の目的は、「被災地支援」という大義名分はもちろんのこと、「そこで出逢うひと(参加学生含む)との関係性構築」も主な目的となっています。その点では、前回・今回共に大変有意義な時間を過ごすことが出来たかと思っています。しかし、「(頻繁に現地に訪れることが出来ない立場として)これらの経験をどう継承していくのか」という課題は居残り続けているように感じます。「できるひとが、できることを、できるしこ(できるだけ)」という言葉を胸に、細く長い支援、否、「支援」という概念を見直し、ハードルを下げることも重要なのではないかと強く感じています。

日本福祉大学  
子ども発達学部 3年  
有賀 みのりさん

DoNabeNet を単発的なものではなくて、いかにして日常的な行事にできるかということが課題だと気づきました。熊本県では、学生が、体験的に学ぶことを目的としていたため、単発的になってしまいましたが、これを継続していくことで、被災地でのコミュニティづくりや防災にも強いまちづくりにつながっていくのだと思いました。

岩手県立大では、日常のイベントとなっているものの、特定の方が参加しているという状態で、新たな人が来ない課題があると聞きました。

日本福祉大の DoNabeNet は発足して一年のため、毎回の DoNabe が新しい人の出会いの連続であるし、来てくださる地域の方もイベント感覚で来て下さる方がほとんどです。DoNabe を身近なものなもの、イベントとしてはなくて、地域の中に溶け込めるようにしていくために、今年度（2年目以降）の活動で、何をしていくか考えていきたいです。



**ご協力いただきありがとうございました！**

※学年はプロジェクト参加時の学年を記載しております。



6. 掲載新聞記事

2017年3月16日 「盛岡タイムス」

盛岡タイムス 2017年(平成29年)3月16日 (木曜日)

# 学生手を組み復興支援



盛岡大学で、復興支援の話し合いをする学生たち。左から、山形県立大学、盛岡大学、盛岡大学、盛岡大学、盛岡大学。

## 仮設のコミュニティ形成など

### 県立大学生 ボラセンのノウハウを熊本へ

盛岡大学は、被災地熊本への復興支援の一環として、ボランティアセンターのノウハウを熊本の学生に伝える。3月15日、熊本の学生と盛岡大学の学生が、熊本のボランティアセンターで話し合いを行った。盛岡大学の学生は、熊本のボランティアセンターで、ボランティアの活動の様子や、ボランティアの活動のノウハウについて話を聞いた。熊本のボランティアセンターの職員は、盛岡大学の学生の質問に丁寧に答えてくれた。盛岡大学の学生は、熊本のボランティアセンターの活動の様子や、ボランティアの活動のノウハウについて、熊本のボランティアセンターの職員から話を聞いた。盛岡大学の学生は、熊本のボランティアセンターの活動の様子や、ボランティアの活動のノウハウについて、熊本のボランティアセンターの職員から話を聞いた。

### 地震被災地益城町で

#### 2019年 くまもとギンガネット

盛岡大学は、被災地熊本への復興支援の一環として、ボランティアセンターのノウハウを熊本の学生に伝える。3月15日、熊本の学生と盛岡大学の学生が、熊本のボランティアセンターで話し合いを行った。盛岡大学の学生は、熊本のボランティアセンターで、ボランティアの活動の様子や、ボランティアの活動のノウハウについて話を聞いた。熊本のボランティアセンターの職員は、盛岡大学の学生の質問に丁寧に答えてくれた。盛岡大学の学生は、熊本のボランティアセンターの活動の様子や、ボランティアの活動のノウハウについて、熊本のボランティアセンターの職員から話を聞いた。盛岡大学の学生は、熊本のボランティアセンターの活動の様子や、ボランティアの活動のノウハウについて、熊本のボランティアセンターの職員から話を聞いた。

盛岡大学は、被災地熊本への復興支援の一環として、ボランティアセンターのノウハウを熊本の学生に伝える。3月15日、熊本の学生と盛岡大学の学生が、熊本のボランティアセンターで話し合いを行った。盛岡大学の学生は、熊本のボランティアセンターで、ボランティアの活動の様子や、ボランティアの活動のノウハウについて話を聞いた。熊本のボランティアセンターの職員は、盛岡大学の学生の質問に丁寧に答えてくれた。盛岡大学の学生は、熊本のボランティアセンターの活動の様子や、ボランティアの活動のノウハウについて、熊本のボランティアセンターの職員から話を聞いた。盛岡大学の学生は、熊本のボランティアセンターの活動の様子や、ボランティアの活動のノウハウについて、熊本のボランティアセンターの職員から話を聞いた。

### 熊本復興支援で 県立大生現地へ

4人が19、20日

熊本市豊子の県立大の学生4人は19、20日、熊本地震で被災した熊本県益城町で復興支援活動に取り組み、現地の学生も参加する活動を通じて、東日本大震災での支援経験や、災害時にも地域で同人が培ってきた近隣住民との交流活動などのノウハウを伝える。

参加する川原直也さん(総合政策学部2年)、石田雪乃さん(社会福祉学部2年)、酒之上真哉さん(ソフトウェア情報学部2年)、川原直也さん(看護学部1年)は15日、熊本県立大を訪問。直也さんは「自分たちがのノウハウを現地にどう活かせるかしたい。九州地区の大学間のネットワーク構築も目指す」と語り、石田さんは「今回をきっかけに自分たちの活動の展開にもつながりたい」と意気込みを述べた。

熊本県立大は「取り組みが現地で定着することを、後援する大学間の連携強化も目指したい」と意気込みを述べた。

活動は昨年9月に結成された「NPO法人いわてのINGAI NET」が主催し、熊本県綾子代表が主催し、熊本県

立大を連携し益城町の仮設住宅(お茶サロン)などを開く。同大や九州などの学生計24人が参加するが、被災地支援の経験が少なく、ノウハウが求められていた。

熊本県立大は学生主体で運営する学生ボランティアの「フタバ」が立ち上がり、約半年、メンバーの村上明里さん(総合政策学部1年)は「仮設住宅でのイベントのやり方は分からないことが多い。住民への配慮など、手法を学び活動に生かしていきたい」と語る。



熊本県立大(左)と熊本県立大(右)の学生が、益城町の仮設住宅(お茶サロン)で交流する。参加する川原直也さん(左)、石田雪乃さん(右)、酒之上真哉さん、川原直也さん

# 仮設で鍋、会話弾む

## 益城町 県内外学生住民と交流会

益城町小谷のテクノ仮設団地で20日、大学生と住民が鍋料理を囲む交流会が開かれた。東日本大震災の被災地で住民との鍋交流会に取り組み岩手県立大(滝沢市)の学生ボランティアセンターの4人が参加し、熊本の学生に交流活動のノウハウを伝えた。

岩手県のNPOと熊本県立大(熊本市東区)が、学生に呼び掛けて実施。岡大学のほか、福岡や宮崎県などから大学生約30人が参加した。

学生は、岩手県の郷土料理で小麦粉の団子が入った「ひつつみ鍋」のほか、もつ鍋などを調理。集会所で住民約20人と食卓を囲むと、「私は薄味が好み」「どの出身ね」などと会話も弾んだ。

「一緒に食事して何げない話をしていて、その人が感じていることや感情が少しずつ見えてくる」と岩手県立大2年の石田雪乃さん(20)。昨夏発足した熊本県立大の学生ボランティアセンター「フタバ」に所属する1年の村上明里さん(20)は「実際の活動例は参考になる。学生同士の横のつながりができたのも心強い」と話した。(岩崎健介)

鍋を食べながら交流する大学生と住民たち  
20日、益城町のテクノ仮設団地



「東日本」の活動 ノウハウ伝授



活動報告を行う石田智乃さん、川原直也さん、池之上穂波さん、山田千尋さん（ひから）

## 熊本支援で新たな知見 いわてGAINET 県立大生が活動を報告

熊本地震に係る支援活動「第2回くまもとGAINET」(いわてGAINET主催)へ参加した県立大の学生による活動報告会は20日、滝沢市の同大で行われた。

19、20の両日、熊本県で大きな被害があった熊本県の益城町の仮設団地などで行った活動を通して感じたこと、経験を今後どのように生かすかを話し合った。

司会から参加したの

熊本地震に係る支援活動「第2回くまもとGAINET」(いわてGAINET主催)へ参加した県立大の学生による活動報告会は20日、滝沢市の同大で行われた。

19、20の両日、熊本県で大きな被害があった熊本県の益城町の仮設団地などで行った活動を通して感じたこと、経験を今後どのように生かすかを話し合った。

司会から参加したの

は総合政策学部3年の川原直也さん(21)、社会福祉学部2年の石田智乃さん(20)、ソフトウェア情報学部2年の池之上穂波さん(20)、看護学部1年の山田千尋さん(19)の4人。

若手県立大の学生は、19日、熊本県立大の学生が地震後に行った支援活動報告を受け、また、若手県立大が滝沢市山前地区で行っている「DonabeneNot」の活動を報告し、20日に実際に仮設団地で行った。

山前地区で実施しているこの活動は、地域住民と学生が協力を交わすことで、災害時の炊き出し訓練とコミュニティ形成を目的とするもので、20日に行った「DonabeneNot」では、仮設団地内の各自が委員長や学生を含め約10人が参加。一部の役員を兼任し、一方で、被災により設置された仮設団地という特殊な環境下で、山前地区での実施と比較し改善する点が見つかっていたことも報告

した。

石田さんは「DonabeneNot」の良さを把握、感じた。学生としての「居場所・関係」を学生に伝えることができた一方、ちのちを伸ばすために地域の人は「丁寧」に、継続的に「考える」ことを、長年を感じた。学生としての「居場所・関係」を学生に伝えることができた一方、ちのちを伸ばすために地域の人は「丁寧」に、継続的に「考える」ことを、長年を感じた。

## 7. 活動協力者紹介

### 【活動先協力機関、団体】

- ・ 公立大学法人熊本県立大学 防災減災プロジェクト
- ・ 熊本県立大学学生ボランティアステーション
- ・ 益城だいすきプロジェクト・きままに
- ・ 益城町地域支え合いセンター
- ・ 熊本県立大学学生ボランティアステーション
- ・ 熊本県立大学わかもん復興プロジェクト
- ・ 九州建築学生仮設住宅環境改善プロジェクト

多くの個人のみなさまからの御寄附、募金箱設置許可をしてくださった各機関の関係者様、私たちの活動を紹介してくださった新聞社、ご協力してくださったすべてのみなさまに感謝申し上げます。